

ー ー ちょっと待ってください。

鈴木 うん。

はい。えーっとじゃあ、今から始めたいと思います。よろしくお願いします。

押切 お願いします。

鈴木 えっとまずですね、あの、押切さんのちょっとプロフィール確認したいと思っ

押切 はい。

鈴木 あの、押切さんは、あの、生年月日っていつになりますか。

押切 えっとー、平成元年なんで。

鈴木 はい。

押切 えっと、1989年の。

鈴木 はい。

押切 6月の22です。

鈴木 ということは、今お年は？

押切 32ですね。

鈴木 32歳。はい。

押切 はい。

鈴木 で、生まれはどちらになるんですか。

押切 と、生まれはあの、山形県です。

鈴木 あ、そうなんですか。

押切 そうです。はい。

鈴木 あ、で、えと一、障害の診断名って、押切さんは。

押切 えっと、自分は頸椎損傷ですね。

鈴木 あ、頸椎なんですね。分かりました。

押切 はい。

鈴木 で、いつから自立生活をされているんですか。

押切 えーっと、と、18に、22 やったと思いますね、22。

鈴木 あー、そうですか。

押切 10年前ぐらいです。

鈴木 10年前。ずっと大分なんですか。

押切 えーっと、えと一、一回自立してですね、22 ぐらいで自立して、えっと一、2年半ぐらい自立したんですよね。で、2年半たってから、あの一回その、埼玉の所沢に、あの国立の職業リハビリテーションセンターってあるんですよ。

鈴木 はいはいはい。

押切 障害者の。

鈴木 はい。

押切 そこに行ったんですよね。

鈴木 そうですか。

押切 そうです。で、えっと一、そんときに結局、1年間しか期限がなかったんで、まああ

の、所沢に申請してとか、ヘルパー事業者探してってのが大変だったんで、あのーその間は、両親、あの、お母さんと住んでたんですよ、母親と。

鈴木 そうですか。

押切 で、そこで、あのー就職決まって。

鈴木 はい。

押切 えーとー山形に帰ったんですよ。そのとき。

鈴木 あー。

押切 そうそう。で、在宅で。

鈴木 はい。

押切 半年ぐらいいて。

鈴木 はい。

押切 で、仕事辞めてまた戻ってきた感じですね。

鈴木 また戻ってきたっていうのは。

押切 え、あの別府に。

鈴木 あ、別府にね。

押切 で、また、自立生活始めたっていう感じなんで。

鈴木 はいはいはい。

押切 まああの、一回目の自立から10年ぐらいいるんですけど、期間が。

鈴木 はい。

押切 その間に、間、1年半ぐらいはちょっと在宅っていうか。

鈴木 あ、そうですか。

押切 自立はしてないんですけど。

鈴木 え、ごめんなさい、ご両親が大分ってことなんですか。

押切 えっとですね、は、山形なんですけど。

鈴木 あ、はい。

押切 僕が所沢に行くって言ったんで。

鈴木 はい。

押切 あの、まあ母親が、あの一時的に所沢に来て、一緒に生活したって感じですね。今も山形います。

鈴木 あ、そうですか。

押切 はい。

鈴木 ごめんなさい。大分ってのはどういうつながりなんですか。大分に、別府っていうのは。

押切 それなんかちょっとあれなんですけど、あの、僕、山形で生まれて。

鈴木 はい。

押切 山形で高校まで育ったんですよ。

鈴木 はい。

押切 で、大学が東京にあったんですよ。

鈴木 はい。

押切 東京の拓殖大学っちゅうところで。

鈴木 あー。

押切 で、あの、あの一大学生生活を送ったんですけど、入学して2カ月で頸損になったんですよ。

鈴木 うんうん。

押切 で、ここであの、東京の病院に緊急搬送されて、んで、あの一まああの、期間が決まっていたんですよ、結局。で、人工呼吸器とかも付けとったんですよ、気管切開して。で、あの、東京の病院に結局、2カ所行って、その、最初、東京の医科大学、日本医科大学っていう所に行って、でその後、亀有の病院に行ったんですけど、で、その後に、もう亀有の病院ももう退院してくださいって言われてたんで、で、山形に戻ろっかなって思ったときに、今度はその福岡に飯塚、福岡の飯塚市にその脊髄損傷センターってあるんですけど、大きいのが。で、そこだけ、あの脊髄に対しては日本でももう3本の指に入るぐらいの有名な病院で、で、あの一、東京から福岡に行ったんですよ、今度。

で、そこで、1年間ぐらいいて、で、その後、どうしよっかってなったときに、結局、頸椎損傷のその特化したリハビリ施設が別府にあったんですよ。で、福岡から別府ってのはまあ、2時間ぐらいなんですけど。

鈴木 うんうん。

押切 2時間半から2時間ぐらいなんですけど、まあ近いっちゃ近いんで、山形戻るに近かったんで、そのまま別府のリハに行って、で、そこで、あの今のセンターと出会ったっていう形ですね。

鈴木 あ、そうですか。

押切 はい。

鈴木 じゃあその、センターに出会った年度って、いつぐらいになるんですかね。

押切 えーっと、自分は、多分もう二十歳から 21 の間ぐらいなんで、な、なん、何年やですか。

鈴木 あ。

押切 二十歳ぐらいなんで。12 年前だから。

鈴木 えーっと。

押切 2009 とかその。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。

押切 はい。

鈴木 じゃあそれ以来、センターと関わりがずっとあるってことですよね。12 年間ぐらいってことですね。

押切 そうですね。

鈴木 あ、はあはあ。あの一、ホームページをあの、あの見たんですけれども。

押切 はい。

鈴木 あの自立支援センターおおいたのあの代表の方って後藤さんでよろしかったんですかね。

押切 あ、そうです。

鈴木 今でもそうなんですか。

押切 今もそうです。

鈴木 で、これあれですよ。2002 年 1 月に設立されたんですよ。

押切 えっと、2001 年やなかったですけども。

鈴木 2001年。

押切 1年。はい。

鈴木 あ、その辺りですかね。

押切 はい。

鈴木 で、あの一、えっと、事務局長の方ってどなたになるんですか。ま、いらっしゃるんですか、事務局長って。

押切 あ、今、います。あの、神田さんっていう人です。

鈴木 神田さん。で、この後藤さんにしても神田さんにしても障害の当事者でいらっしゃるっていうことですよ。

押切 そうです。頸椎損傷です。

鈴木 あ、なんかあのホームページちょっと見たときに、あの、頸損の人多いのかって言うの思ったんですけど、やっぱ、お。

押切 そうですね。あの。

鈴木 ええ。

押切 もう90パーぐらいがうちのスタッフ頸損です。

鈴木 やっぱり。あ、そうですか。

押切 はい。

鈴木 やっぱり、その先ほどおっしゃっていただいたその、あの一、リ、あの病院ですか、あのセンターとの関係があるってことなんですか。病院と。

押切 そうですね。

鈴木 はい。

押切 やっぱり別府にその頸椎損傷のリハビリ施設があるんで。

鈴木 はいはい。はいはい。

押切 もうその流れっていうのが大きいですね。

鈴木 あー、なるほどね。で、あの一、センターの住所ってユニバーサルマンション2階って書いてあったんですけど。

押切 はい。

鈴木 これ、い、今でもそうなんでしたっけ。

押切 えっとですね。

鈴木 はい。

押切 あの一、7月のもう中旬ぐらいにちょっとマンション、マンションじゃないや、事務所移転なるんですよ。

鈴木 あ、もうもうそろそろ。

押切 そうですね。

鈴木 ああ。

押切 来週に移転です。

鈴木 あー、すいません、なんかバタバタ忙しいですね。

押切 ああ、全然大丈夫ですよ。

鈴木 で、あ、そうですか、じゃあ、もう場所は完全に変わっていくんですね。

押切 そうですね。場所がちょっと、あの多分変わりますね、もう1週間後なんで。

鈴木 これ、えっと、かなりもうとお、なんかあの、何ですか、西別府病院の近くになるんですって。

押切 そう。ちょっと近くなりますね。

鈴木 ちょっと近くなる。あの一ちなみに今のこのユニバーサルマンション 2階っていうのは、え、ごめんなさい、今押切さんいらっしゃる場所がそこなんですか。

押切 あ、そうです。今いる所が事務所になってます。

鈴木 あ、はいはいはい。これはあの、一般のマンションなんですかね。

押切 そうですね。一般の方もいらっしゃいます。

鈴木 あー。で、あの一センターの、えっと一利用者の方も、当事者の方もいらっしゃる。

押切 はい、います。僕もいます。

鈴木 ああ、そうなんですか。

押切 はい。

鈴木 結構大きいんですか、これ。

押切 そうです、ろ、全部で、えーっと、6、6階まであるんで、6階で。

鈴木 はい。

押切 ええとー。結局2階が、1階がもうエントランスなんですよね。

鈴木 はいはいはいはい。

押切 で、2階が一応あの一事務所として借りてて。

鈴木 はい。

押切 3階から6階が、あの一まああの賃貸マンションになってます。

鈴木 あ、なるほど。な、えっと何人ぐらいが、えーっと、いらっしゃるんですか。

押切 と、へ、部屋数的には、12部屋ですかね。

鈴木 12。

押切 そうですね。12部屋。

鈴木 12部屋。全体でですか。

押切 あ、全体でですね。

鈴木 あ、なるほど。で、そのうち、えっと、センターの利用者の方は何人ぐらい。

押切 えーっと、そのうち、センターの利用者は、えー、ん、ちと待ってくださいね。1、2、3、6部屋ですね。

鈴木 あ、6部屋。これあれですよ、あの一賃貸とかそういうものですよ。

押切 そうですね。賃貸マンションです。

鈴木 あ、はい。で、なんかあの、今度移転される場所ってなんか購入されるんですけど。

押切 えーっと、それも賃貸です。

鈴木 あ、そこも賃貸なんですか。

押切 はい。

鈴木 で、同じようなマンションの形態なんですか。

押切 そうですね。あの事務所があつてっていう形で。

鈴木 はい。で。

押切 で、上が賃貸マンションですね。

鈴木 なるほど。で、また、利用者の方、あれ？ あ、でも、あれか。事務所だけ今回移るってことなんですか。

押切 あ、一応。

鈴木 はい。

押切 そのの、えーっと、まあオーナーさんがおって。

鈴木 はい。

押切 で、一応その、ま、設計段階から一応携わらせていただいて、一応そういった、あの、完全ユニバーサルデザインっていう造りになってて、で、えーっと、そこに移行しますね、僕も。

鈴木 あ。

押切 い、移行っちゅうか、引っ越す。

鈴木 引っ越しされるってことですね。

押切 はい。

鈴木 他の5名の方も同じように。

押切 そうですね。みんな引っ越します。

鈴木 あ、みんな引っ越しされるんですか。

押切 はい。

鈴木 なるほどね。やっぱりあれですか、あの、センターと、あの一住まいが近くにあるってのはすごくべ、便利というか。

押切 そうですね。やっぱりあの、東京みたく、東京都かあの都市部と違って、やっぱり JR とかそういったのでやっぱりないんですよね、結局。で、あの、別府って特有で、結構坂なんですよ。街の造り自体が。

鈴木 へー。あ、そうですか。

押切 なんで、やっぱりその、例えば一駅とか二駅とか結構離れとつても、その電車使えば行けるってなれば、ま、通勤も可能なんですけど、なかなかそこまでその別府っちゅうのは、公共交通機関整ってないんで。

鈴木 うんうん。

押切 やっぱり通勤っていうと、結構その自分で車を運転できるとか、そういった方はやっぱりでき、ま、可能ではあるんですけど、結構それは重度の障害ある方ってのはなかなか通勤が厳しいんでっちゅうところですかね。

鈴木 なるほどね。

押切 うん。

鈴木 あの一、アシカリさんが移る場所もそこなんですたっけ。そののも。

押切 あ、そうです。

鈴木 ですよ。

押切 はい。

鈴木 はいはい。

押切 はい。

鈴木 じゃあもう一部屋確保されてるってことなんですね。

押切 あ、そうです。

鈴木 で、あの、自立生活体験室もそちらにあるんですたっけ。

押切 えーっと、それがですね、また、違う場所で。

鈴木 ああ、はい。

押切 あの、それはあの、日本財団のやっぱり助成頂いてやってる場所なんですけど。

鈴木 はい。

押切 それは、あの、新事務所から大体、大体っていうか、1本下の通りになるんですよ、ただ。

鈴木 ふーん。

押切 2本か、2本下の通りになるんで。

鈴木 はい。

押切 ま、徒歩でいったら5分ぐらい。

鈴木 あ。

押切 5、6分ですね。

鈴木 なるほど。なるほど。これ、意図的にその場所にしたんですか。つまり、新しいマンションの中には、設置しなかった。

押切 あ、そうですね。やっぱりその、あのー、ま、今回そういった、あの日本財団の助成がきっかけで体験室を設けたちゅうのもあるんですけど、まあできればその、ま、マンション内というより、ちょっとマンションから離れた場所っていうところで、ま、ちょうどその、プラス、その別府って結局、その南海トラフが来たときに、あのー、津波が、(***)

*ソウテイ@00:12:37)されるんですよね、でかいのが。

鈴木 あー。

押切 てなったときに、やっぱり、あの一、海の、海、海から近い所結構あるんですよね、安いのかで、あったんですけど、それよりやっぱりその、最低ここまでやってたら、まあ津波の被害がないだろうっていう場所プラス、そのマンションに近い所。

鈴木 うんうんうんうん。

押切 新しい事務所にですね。

鈴木 なるほど。

押切 ていうところで、今回そこをけん、あの、お借りすることに話。

鈴木 あ、そこの自立生活体験室っていうのは、なん、一軒家とかですか。

押切 えーっとですね、そこも賃貸マンションなんですよ。

鈴木 あ、マンション、なるほど。これ。

押切 この2階ですね。

鈴木 あー、そうですか。あの一、こう、住む場所と、体験室をこう、わ、分けるっていうことのい、い、意味っていうか意義ってのどんなふうにお考え。

押切 まず、センターの体験位置というですか、センター内に造ると。

鈴木 そうですね。

押切 ていうところですね。

鈴木 ええ。ええ。

押切 ま、やっぱりその、センター内に造るっていうよりは、やっぱり自立生活体験しても

らう中で、やっぱりそのマンションの住宅探しとかってのも、ね、ILP ン中入ってくると思うんですけど、やっぱりそうなったときに、普通のそのセンターが、の内にある体験室っていうよりかは、その地域にあるそういった賃貸マンションで体験してもらったほうが、まあ後々その本人が自立する際に、住宅を探すときに、やっぱり参考になるからとは思うんですよ。

鈴木 なるほど。

押切 で、やっぱりその、事務所に体験室もし造るとなったら、多分完璧バリアフリーになると思うんですよ。多分どこのセンターもそうやと思うんですよ。その段差が少ないようにしてるとか。じゃなくて、もうその、ま、バリアフリー、なるべくそういった段差を少ない所は選んだんですけど、やっぱりそういった少しバリアーがあるとか、ちょっと介助が、ね、少しあったら生活できるっていうような環境のほうがいいと思ったんで、やっぱりそこは分けましたね。

鈴木 あ、なるほどね。

押切 うん。

鈴木 あとなんか、あれですか、なんかその、センターの事務所とちょっと離れたほうがいいってなんかあるんですか。なんかそういう体験室とセンターの。

押切 うん。

鈴木 一緒の場所よりも。

押切 あ、あの一、自分が言うのも何なんですけど、やっぱりそういった例えば通勤とかってなったときに、まあそれも経験できるであろうし、やっぱ離れ、ちょっと離れてるほうがですね、いいんで。

鈴木 なるほど、なるほど。

押切 やっぱり、その、たい、自立生活体験っていったときに、やっぱりその、センター内やったらやっぱりちょっとなんか、なんつったらいいですかね。自立って感じしないと思うんですよ。

鈴木 うんうんうん。

押切 やっぱ、ちょっと離れて、普通の賃貸マンションのほうが、あ、体験してるなって気にはなれると思うんですよね。はい。

鈴木 なるほど、なるほど。

押切 うんうん。

鈴木 これまでは、あの、自立支援センターおおいたさんでは、その体験室ってなかったんですね。

押切 そうなんですよ。なかったんですよ。あの、なかったんで、一応そのスタッフ、当事者スタッフのまあ、あの、お家をちょっと借りて。

鈴木 ふーん。

押切 そこで体験してもらった形でしたね。今までは。

鈴木 あ、そうですか。

押切 はい。

鈴木 なるほどね。ま、それでも何かとやってこれたっていうことなんですね。

押切 ま、何とか。ハハ。

鈴木 ハハ。

押切 何とかやってこれまし。ただね、やっぱり、あの一、ま、知り合いでちょっとこれやっぱ体験室あったほうがいいよねっていう話にはなってたんですけど。

鈴木 あー。

押切 はい。で、そのなんな中、その、そういうお話をいただいて。

鈴木 あー、なるほど。

押切 はい。

鈴木 やっぱりあれですかね、あの、体験室があつて、そこで体験して、あの、自分の住まいに行くっていう形が、望ましいっていうふうにお考えですか。

押切 そうですね。やっぱり、あの、実際に体験する場所って必要だと思うんですよ。やっぱりその、(#####@00:16:09)た、ね、いろいろその ILP 通して、ヘルパー利用であったり、金銭管理やって制度学習だったりいろいろやると思うんですけど、一番大切などこってそこだと思うんですよ。ヘルパーさんを利用して体験するっちゃうことが。で、結局座学だけやってたら、それを伝えるのは伝わると思うんですけど、やっぱり体験しないとイメージも付かないと思いますし、やっぱりそういった体験室ってのは間違いなく必要やとは思ってるし、ILP 中でも一番大切だとは思ってますね。

鈴木 なる。例えばもう住まいを決めてしまつて、そのの住まいでそういった体験することよりも、その別の所で体験してから自分の住まいに移るってことのほうがいいってことなんですね。

押切 そうです。できれば、多分、まあ、あの、新居を見つけるってのもいいとは思んですけど、まあ、あの、ま、一回体験室でワンクッション置いてるほうが、例えば、あのーこういういったものが必要だよとか、もっと、で、部屋探しするときの材料になると思うんですよ。一つ目からその、なんも体験しないで部屋探してのなかなか難しいと思うんですよ。うん。じゃけん、やっぱりその、住宅探しの前に、まあワンクッション置いて、体験してみ、自分の必要なものを一回、まあ改めて考え直すっていうのは必要やと思いますね。

鈴木 皆さんそうやってやられてるんですね、じゃあ。

押切 そうやって自分も体験しましたね。

鈴木 あ、そうですか・

押切 はい。で、アシカリさんもね、また体験してもらいたいんですけど、なかなかこういったコロナ禍っていうところがあるんで、ちょっと体験は難しいかなって思ってますね。

鈴木 なるほどね。

押切 うん。

鈴木 あの、今、自立支援センターおおいたの利用者の方って何名いらっしゃるんですか。

押切 えーっと、結構いらっしゃいますね、その。何人かな。ちょっと数え切れない。

鈴木 数え切れない。

押切 切れないです。

鈴木 100名とか。

押切 いや、そんな、そ、そんないっぱいはいないです。

鈴木 あ、そんなにいない。ハハ。

押切 はい。はい。20～30とかそんぐらいですね。

鈴木 あ、20～30。

押切 はい。

鈴木 あの、他にもあるんですよね。あの、自立支援センターって、おおいた以外に。えっと、宇佐でしたっけ。

押切 あ、そうですね。あのーそのー正式にその JIL、JIL に加盟してるってわけじゃないんですけど。

鈴木 あ、そうですか。

押切 まあ例えばその、まあ言ってみたら支店みたいな感じですね。支店、支店ってゆうか、あ、支部、支部みたいな感じ。

鈴木 あ、支部、別の事業所。

押切 あ、えーっと、元は一緒なんですけど。

鈴木 えー。

押切 ただあの、事務所として置かしていただいでるっちゅうような形で。

鈴木 ふーん。

押切 今あるのが宇佐と、あと、宇佐市ってあるんですよ、大分県に。

鈴木 はい、はい。

押切 宇佐市っていうところと、あとは大分市の、と、あとは自分たち別府の三つですね、今、センターとしてあるのは。

鈴木 大分市にもあるんですか。

押切 大分市にもあります。

鈴木 それ名称は何ていう名前なんですか。

押切 えっと、バリフラットおおいたっていうんです。

鈴木 あ。

押切 あの、あの、バリフラット。

鈴木 なんか、ホームページに載ってたような気がするな。

押切 あ、そうです。

鈴木 はいはいはい。あの一、えっと、自立支援センターおおいたさんの活動として、なんか病棟訪問することってあるんですか。

押切 あー、ありますね。病、でも、病棟っていうのは、やっぱり西別府が、しかないですね。病院訪問っていうのは。

鈴木 あ一、西別府病院。

押切 うん。

鈴木 で、これって、結構前からやってらっしゃるんですか。西別府病院訪問するって。

押切 えっと、僕がその最初行ったのが2007年とかそんぐらいやったんで。

鈴木 はい。

押切 ま、定期的になかなか、なかなか訪問できなかつたんですよ、その、あの何ていったらいいんですかね。まあ言ってみたら、結構その、なかなか入んの厳しかったですよ、西別府病院、最初っから。結構感染とかがあって、呼吸器関連だったんで。で、で、そんな中、まあ、アシカリさんと出会って、まあそれをきっかけに、アシカリさんに来ましたてで、何回かは行きましたね。

鈴木 あ、じゃあ、アシカリさんが、さい、最初って感じなんですか。

押切 そうですね。一番最初はアシカリさんですね。

鈴木 あ、そうですか。

押切 はい。

鈴木 あれ、えっと2012年ぐらいでしたっけ。

押切 そうです。2012年っていうと？ ちょっと待ってくださいね。えーっと。一番最初が、2013年の夏ですね。

鈴木 あ。

押切 最初にアシカリさんと出会ったのが。

鈴木 あ、そうですか。じゃそれまでは、あの、一応訪問はするけど、まあ人に会うとかそういうことはなかったってということなんですかね。

押切 そうですね。あんまり。

鈴木 はあはあはあ。

押切 関わりは少なかったですね。

鈴木 あー。

押切 どちらかという、病院というよりは施設のほうが多くて。

鈴木 施設。あー。

押切 施設ですね。あのまあ、僕らの頸椎損傷の施設もそうなんですけど。

鈴木 はい。

押切 あの、あとはその、ちょっと隣町の日出町っていうのがあって、そこに結局、ゆうわっていうのがあるんですね。その別府市に太陽の家ってあるんですよ。大きい。

鈴木 あ、はいはいはい。ありますね。

押切 その、がやってる所なんですけど、施設があって、それが、隣の町にあって、そこ訪問したりだとかっていうことがありましたけど、病院ってのはなかなかなかったですけど。

鈴木 あのー太陽の家とか訪問されて、どんなことされてたんですか。

押切 まあ、太陽の家では、結局その、ま、その太陽の家の、えーっと、仕事してる所っていうよりはそういった施設のほうになるんですけど、まあそこでその、あの、自立支援とかはしてましたね。まあ、ILP、ピアカンとかですよ。はい。

鈴木 あ、ILP、ピアカンをそこでやるんですか。

押切 えーっと、ILP やりますね、ピアカンもやりますね。

鈴木 あ。

押切 はい。

鈴木 そのの、あ、在宅の方がっていうことですか。その、入所されてる方ではない。

押切 あ、入所されてる方です。

鈴木 あ、入所されてる方にやるんですか。

押切 そうです。そうです。

鈴木 へー。

押切 で、やっぱりその入所されてる方でも自立したいって言う人もいますよね、やっぱり。

鈴木 なるほど。

押切 で、結構その、そのゆうわってのが個室の部屋とかなんですよ。

鈴木 へー。

押切 集団部屋って言うよりは。

鈴木 はいはい。

押切 なんで、そのの、まあ個室でピアカンもできますし、まあその間も介助者に待機してもらったりとかもありますし。

鈴木 え、介助者のた。

押切 は、待機ですね。

鈴木 あー。

押切 ちょっと別ん所待機とか。

鈴木 はいはいはい。え、でそ・・・。

押切 やっぱ、うん。

鈴木 じゃ、その、えっと、ILP をやって移行される人も中にはいらっしゃる。

押切 ああ、いますね。

鈴木 は一。え、結構あれですか、え、年間、何人ぐらいですか、そういう方って。

押切 いや、それはもう、年間何人っていうよりかは。

鈴木 はい。

押切 まああの、設立から 50 ぐらいですね。50 人とかそんぐらいですね。

鈴木 あ、でも結構いらっしゃるんですね。50 人ですか。

押切 そうですね。その、逆にその、なかなかその、何ていうんですか、ILP つつたら結構 2 年とか 3 年とかかかる、ねえ、人、いらっしゃると思うんですけど、もうどちらかといったら、もう例えば、あの、もう県外から来られてる人とかも、県外で例えば一人暮らしとかしよった人がこう、こっちに戻ってきて、ま、そのまま、まあ長い ILP とか受けられてそれを自立する方もいらっしゃる方もいらっしゃいますし、軽度で、そこまで介助が要らない人やったら ILP なんかも少なくなると思うんで、そういったのも全部含めての話ですね。

鈴木 あのー、具体的にどういうことされるんですか、ILP として。

押切 まあ本当、今、アシカリさんにやってることそのままなんですけど、ま、言ってみたら、その、まあ(****シカクシャケン@00:23:55)っての大きくなってくるし、介助と、(****シカクタイケン@00:23:59)、介助体験とかですね。あとはその、ILP 通してヘルパーさんとの関わり方とか、そういった(****カタチオリ@00:24:07)体験もそうなんですけど、そういったことをまああの継続的にやっていくっていう形プラス、あとはやっていく中で本人がもうちょっとこうしたらいいよねとか、本人がやってみたいこととか、まああの、公共交通機関使った外出とかでもいいんですけど、ま、そういったのをは、取り入れ

てって、ま、本人が、そこで、もう本当に自立したいっていうのと、まああの、目標の(***ビ@00:24:31)が決まったらそれに向けてやっていくっていうような形ですけど。

鈴木 なるほどね。うんうんうん。

押切 まあなんで。そうですね、まああの、制度的な勉強とかでそういうのも大切だと思うんですけど、その、JILの理念とかですね、っていうよりかは、どちらかというと、体験とかのほうが多いですね、うちとして。

鈴木 やっぱり、あの、何ていうんですかね、それはすごく施設の利用者の人にとってとても重要だなんての思われますか。

押切 はい。あ、もう一回言ってください。

鈴木 あ、長年施設にこういらっしゃる人にとって、やっぱりすごく重要だと思いますか。

押切 あ、それはもう間違いなく重要だと思ひまして、あの、やっぱ、まあ自分たちのセンターとかではないんですけど、本当、言ってみたら、その施設とかって、朝昼晩、あとまあ食事に関してやっぱり決められたものが出てくると思うんですよね、メニューが決まってる。でも、その作ってる工程とかも知らないですし、物の値段も分かんないですしつつたときに、やっぱ、極端な話、例えばにん、ねえ、例えばにんじんやったらにんじんの原型知らんで、もうあのまんまがにんじんやと思ってる方もいらっしゃいますし、やっぱりそういうのってやっぱ施設の方ってのもう本当一からなってくると思うんですよね。

鈴木 うんうんうん。

押切 なんで、まあ、本当、言ってみたら、でも、あのーアシカリさんみたく、やっぱ普段からそういったネットとかテレビとかで、そういった情報を得てる人は、ね、あの、そういったところは省略できると思うんですけど、本当知らない人ってもうその、まあその話からなってくるんで。

鈴木 フフフ。

押切 やっぱり、そういったのって大切やとは思ひますね。

鈴木 なるほど。

押切 時間かけてくことも大切でしょうし。

鈴木 うんうんうん。あとそのピアカウンセリングっていう形で、当事者の方がまあ関わりながらやるってことですね。

押切 そうですね。それはもう当事者間でやることですね。

鈴木 はいはい。その意義について、どういうふうに押切さんは思ってますか？

押切 あ、やっぱりそれも、結構、うち、あのILPと同じぐらい大切だと思ってて、やっぱりその、ね、施設とかっていったら、自分が思ってることってのがもう素直に吐き出されると思うんですね。そんな中で、その、まあ自立生活に必要なことも大切だと思うんですけど、それ以外でも、普段からの愚痴とかでもいいと思うんですけど、そういった吐き出す場っちゅうのが、なかなかないんで、そういったことを、ね、ピアカン通してやってくことで、その精神面のサポートはできると思っています。

鈴木 やっぱりとう、当事者のほうがよいつていうか。

押切 そう。あ、当事者のほうがいいです。あ、当事者、その健常者がやられるよりってことですね。

鈴木 そうですね。

押切 ああ、絶対それはもう当事者のほうがいいと思います。ま、実際、そういった経験とかやっぱ共有できる部分がある、共感できる部分もあると思いますし、やっぱりなかなか、ね、健常者には言えないけど、あ、障害者だから言えるっていう方が多いんで、それは絶対、当事者間ってのはもう間違いなく、それは徹底してますね。

鈴木 なるほど。あの、それが合わないっていう人いますか？

押切 いや、あんまりいないですね、逆に。

鈴木 あー、そうですか。

押切 うん。健常者のほうが言いやすいつてのあんま聞かないっすね。こちらで。

鈴木 あー、はあはあはあ。なるほどね。

押切 まああの、中にはいらっしゃるかもしれないですけど。

鈴木 フフフ。

押切 フフフ。

鈴木 あの一、アシカリさんと会ったのがその二千、えーっと13年の夏っていうのは、そのどういうきっかけでお会いしたんですって。

押切 えっと、たまたま西別府病院でなんかイベントあったんですよ。そんときって、もう2013年とかその10年近く前って、西別府病院で結構イベントやってたんですよ、その地域の方との交流できるようなイベントを。例えば、まあそのコンサート、僕はコンサートで知り合ったんですけど、例えばあとは、なんか、なんだ、はい、はい、俳句とか、なんかそういった形のやつで、なんか地域のおばちゃんとかあと学生ボランティアとか来てくださってるようなイベントとか、そういったのがあって、僕はたまたまそのコンサートのイベントに行ったときに知り合ったって形ですね。あの、コンサート始まる前に、ま、あの、待ち時間があったんで、そこで病院こう、ぐるぐるしてるときにたまたま会ったみたいな感じで。はい。

鈴木 え、交流ってごめんなさい、結構前からあったんですか、その西別府病院。

押切 あ、僕ですか。

鈴木 あ、えーっとごめんなさい。さっきの、えっとコンサートやったりとか。

押切 はいはいはい。

鈴木 ええ。

押切 あれはもうそうですね、2013年のとき、僕は(****トナリノシニデータ@00:28:57)ときは、そういった地域の方と西別府病院のこう、交流みたいなのはありましたね。

鈴木 それ前から。

押切 だいぶありますね。2013年なんで、10年近く前からありましたね。

鈴木 あ、10、10年近く交流があったんですか。あ、交流ってかそのイベントっていうか。

押切 あ、あ、もう一回いいですか。ごめんなさい。

鈴木 あ、えっと。その、西別府病院のその、要するにコンサートとかやるわけですよね、地域の人と一緒に。

押切 はいはい。はい。

鈴木 そういう、あの、地域との交流っていうのは結構前から、もう。

押切 そうですね。最近はなんかもうや、全然やってないんですけど。

鈴木 はい。

押切 僕が昔、その、2013年とかそのぐらいのときは、結構月一ぐらいで何かしらやってきましたけどね。

鈴木 へー。

押切 なんか、すごいのがあったら、あの、なでしこジャパンの監督とかも来よったりしてましたけど。

鈴木 あ、そうですか。それ。

押切 今回の、はい。あ、五輪。

鈴木 ニシ。

押切 あの、サッカー選手とかも来とったりしました。

鈴木 ふーん。それは2013年の前からもそういう、あの一、交流ってのがあったってことなんですかね。

押切 あったと思いますね。ちょっとあの、詳しくは分かんないですけど。

鈴木 ああ。

押切 何かしら多分、そういったなんかをやってたみたいですね。

鈴木 ふーん。で、あの、自立支援センターおおいたさんとしては、その、その2013年の夏に、その、えっと、えっと何でしたっけ、音楽、音楽というか、コンサートで。

押切 はい。

鈴木 関わってってことですよ。

押切 そうですね。で、会って、で、どっから来たんみたいになって、たまたま。

鈴木 ふーん。

押切 それを僕、別府の一人暮らししてるんですみたいな。

鈴木 あー。

押切 話になって。

鈴木 はいはい。

押切 で、あの、もう一人暮らしできるみたいになって、で、ヘルパーさん使ってみみたいな流れですね。

鈴木 なるほどね。

押切 その自立支援しに行ったつもりなかったんですけど。

鈴木 あ、はいはいはい。

押切 たまたまみたいな形で。

鈴木 あー、なるほど。で、その頃からあれですよ。あの、えっとごめんなさい。ヘルパー使うっていう話になってくるってことですか。

押切 あ、アシカリさんがですか。

鈴木 はい。

押切 それでまあ興味を持ち出したっていうところ、すぐは使ってないんですけど。

鈴木 ふーん。

押切 まあちょっと興味持ち出して、で、あの一、たまに一緒に外出したりとか、ま、そのときはアシカリさんはヘルパーいないんですけど、で、後々結局重度訪問の移動で、まあ、あの病院内でも重度訪問使えるじゃないですか。

鈴木 はい。

押切 (***)ニチ@00:31:17)で。なんで、その、月に20時間ちょっとぐらい、移動でヘルパーさんと外出はしてましたね。

鈴木 それいつ頃ですか。

押切 えーっと何年前つつたら、ちょっとそれはちょっとアシカリさんに聞いてみないと分かんないですけど。

鈴木 ああ。

押切 まあ、あの、すぐではなかったと思いますね。その2013年すぐではなくて。

鈴木 ああ、はあはあ。

押切 ここ何年、多分5年6年とかそんぐらい前ぐらいじゃないすかね。

鈴木 あ、じゃあ、あれですか。じゃあ、あ、出会ってから数年後ぐらい。

押切 そうですね。

鈴木 ああ。その、えっと、重訪の病棟内のヘルパー利用ってやつですよ。

押切 その病棟、まあうちのヘルパーですね。

鈴木 ああ、そうですね。

押切 はい。はい。

鈴木 (****イトコノサイキョウ@00:32:00)でね。

押切 で、そうですね、で、外出下見で。

鈴木 ああ、で、えーっと、そのヘルパーを使う前も一緒になんか出掛けたりとかしてたっ
てことですか。

押切 えっとどちらかといったら、あの、そこまでがつつり一緒に出たりとかはしてないんで
すけど、あの、僕らのセンターもイベントとかしてるんですよ、何回も。あの、月一ぐら
いでなんか、いろんなセン、あの知り合いとかもイベント例えば、まあバーベキューとか花
見とかそんな、は、もう僕たちも同じようにしてて、そこ、例えばバーベキューにアシカリ
さん誘って、アシがちょっと来るみたいな。

鈴木 へー。

押切 そういう程度でしたね、最初は。

鈴木 あ、でもそういう関わりをやってるんですね。

押切 そうですね。

鈴木 その出会って、夏に出会って、その、その年ってかその翌年。

押切 次の年とか。そうですね。

鈴木 はい。バーベキューに誘ったりとか。

押切 そうですね。

鈴木 へー。

押切 そのときはもう西別府も外出とか制限なかったんで。

鈴木 あー。

押切 結構、あの、頻繁に出入りはできたんで。

鈴木 うんうん、あ、そのときはっての、い、いやコロナと比べてってことですか。

押切 あ、そうですね。そうですね。

鈴木 あ、はいはい。

押切 今みたいなせいか、コロナの前の話ですよ。

鈴木 そうですね。え、えっと、で、その2014年ぐらいにまあ、バーベキューに来たりとかして、で。

押切 そう、2014、15、そんぐらいですね。

鈴木 その辺りですよ。で、えっと、その頃って、えっと、アシカリさんはマスク着けてますよね。

押切 もう僕が出会ったときから鼻マスクしてるんで。

鈴木 ですよ。

押切 はい。

鈴木 それは、あの一、何ていうんですかね、医療的ケアの対象になるんですか、その。

押切 あれが、もう多分すごいグレーゾーンやと思うんですけど。

鈴木 ですよ。

押切 ま、あの一、鼻マスクなんで。

鈴木 はい。

押切 ね、今、痰吸入やったら、(****サモ@00:33:48)検診とかでヘルパーさんもできると思うんですけど、そのマスク、まあ取れることはないですよ、鼻マスクが。ただちょっと取れたりしたら、ちょっとヘルパーがきゅっと直すぐらいだと思うんで、ま、そこまでのアシカリさんは医療機械は必要ではないんで、そうですね、ちょっと直すぐらいやったら多分誰でも、ね、他のセンターでも多分一緒やと思うし。

鈴木 なるほど。

押切 はい。

鈴木 あの。

押切 ただその厳密に言うと。

鈴木 ええ。

押切 やっぱ呼吸器の、ね、管理ってのはやっぱり、いつもグレーゾーンの配慮はあると思いますね。

鈴木 でも、痰の吸引が必要とかそういうことはないわけでもんね。

押切 ああ、それはないです。痰吸入は今んとこないですね。

鈴木 ですよ。あの一、何ていうんですかね、その、例えば気管切開している人とかって。

押切 はい。

鈴木 外出って西別府病院はどうなんですか。

押切 外出ですか。

鈴木 はい。してますか。

押切 も、してる方いらっしゃるんですが、家族とかですね、やっぱり。

鈴木 家族のね。はいはい。

押切 そうですね。まあでも、そういった、あの、例えばね、その気管切開してる患者さま、じゃあちょっとコンビニ行ってきますわっていうと多分西別府 OK 出されると思うんですよ、一人で行くっていったら。ただやっぱりその、ま、ね、家族と一緒に出掛けるとかっていったら、普通に外出したときは多分いらっしゃると思うんですけどね。

鈴木 なるほど。看護師と行くってこともあるってことですか。

押切 いや、その西別府の看護師ですよ。いや、それはないと思いますね。看護師と一緒に行くっちゃうのは。ちょっと、それもちょっとアシカリさんに聞いてもらったほうが、多分正確だと思うんですけど、多分基本的に家族とかになると思います。多分、病院側の看護師が、どう、一緒に行くってことはないですね。

鈴木 ちゅ、あの一、えっと一、あれですか、その一。ヘルパーがびょう、要するに、あの一、重訪のヘルパー、つまり医療的ケアのできるヘルパーと一緒に行くってことはありますか。

押切 どうですかね。ちっと、西別府の気管切開している人を、ちょっと重訪で行ったことがないんであれなんですけど、多分、行けると思うんですけど、その、まあ本人で例えば、ね、例えば、ま、本人がよければいいと思うんですけど、まあ、一応多分西別府も結構そこら辺ピリピリするかもしれないんで、まあ家族は了承の上やったらいいとかにはなると思いますがね。

鈴木 なるほどね。あの一、自立支援センターおおいたさんって、あの、有償の介助サービスってやってらっしゃいますよね。有償の介助サービス。

押切 ああ、そうです。やっています、やっています。

鈴木 これ、入院とかね、入所の人が対象だっていうふうにホームページ書かれてるんです

けど。

押切 はい。あとはまあその、外部、例えば温泉に入浴介助とかそういったものですね。はい、もやっています。

鈴木 で、ああ、なるほど。で、あの、でもまあ、入院についてはもう、ヘル、あの、重訪が使えるっていうことで。

押切 そうですね。

鈴木 まあ、そっち優先でってことになってるんですかね。

押切 そうですね。それはもう重度訪問で。

鈴木 ああ、はあはあ。

押切 はい。

鈴木 アシカリさんてこの有償サービスは使った経験はあるんですか。

押切 あー。どう。ないと思うんですけどね。基本的に。

鈴木 うーん、なるほどね。

押切 はい。

鈴木 ということは、アシカリさんって出掛けるときはまあ友人とか。

押切 そうですね。

鈴木 と一緒に出掛けてて、で、その2015か2016年ぐらいに。

押切 はい。

鈴木 自立、あの、おおいたさんのヘルパーを使われるようになったってことですね。

押切 そうですね。まあそうですね。アシカリさん自身、家族とか友人とかすごい多いんで、うん、逆にヘルパー使わないで、友人と外出したりとかもしますし、ヘルパーさんなしで。うん。

鈴木 じゃああんまり使ってないってことなんですか。

押切 ま、そうですね。どちらかといったら、例えば、ちょっとあの、県外行くとか、そういった長距離になるとかってなったときは、もうヘルパーさんがつつり取れば1日8時間とか。

鈴木 うんうんうんうんうんうん。

押切 入れたりして行きますけど、まああの、ちょっと1時間ぐらい、あの一、スーパー、スーパー行くっちゃうかちょっと出るからっちゃうところでは、多分使ってなかったです。どちらかといったら、長時間で使ってましたね。

鈴木 ふーん。

押切 まあ本当に、短時間とかやったら、その友人とかと出入りはしよったりする。

鈴木 なるほどね。もう専属のヘルパーって感じですか。あの、お、おおいたさんから派遣されるヘルパーさんて。

押切 ああ、その当時ですか。

鈴木 その当時ですね。

押切 あ、そうですね、やっぱりその呼吸器に慣れてる。

鈴木 うん。

押切 方をもう行かせてましたね。

鈴木 特定の人。

押切 もうなん、そうですね、2、3人ぐらい特定決めてて。

鈴木 なるほど。

押切 もう、もうど、ね、やっぱ自立されてて、しる、あの一新人さんとか行ったら、なんかあったときは怖いんで、もうちょっとベテランのヘルパーさんに行ってもらってましたよ。

鈴木 あの、それ利用するときって、病院側からなんか言われました？

押切 いや、特に言われなかったです。その重度訪問ですよ。

鈴木 あ、そうですね。

押切 言われなかったですね。

鈴木 ああ、そうですか。なんかその呼吸器の、あの、ま、レク、レクチャーとかないですよ、別に、呼吸器の使い方とかで。

押切 そうですね。そこまでなかったです。

鈴木 ですね。だから、基本的に病院サイドでは、そこまで想定、何ていうんですか、その支援、支援ていうか、その呼吸器の管理っていう部分での支援ってのは想定してないわけですね。

押切 そうです。そうですね。多分、アシカリさんからも多分話聞くとするんですけど、その、ヘルパーさん使ってその重訪で外出するときも、その一、必ず、そのアシカリさんの彼女さんがいらっしゃるんですよ。

鈴木 はい。

押切 もう彼女に。

鈴木 はいはい。

押切 近い、近いっちゃうか。

鈴木　そうですね。

押切　彼女ば、っばい人がおって。

鈴木　いますね。

押切　その人が同席しよったんです、ずーっと。外出んときに。なんで、病院側とその方、あの、彼女さんは、すごいもう、あの一、まあお互いをもう、何つつたらいいんですかね、あの、信頼してるっちゅうか、があつたんで、もう(****コキタイ@00:39:48)とかも、じゃあもうその彼女さんがやるっちゅうのを知ってたんで、あの、なんかあっても大丈夫つてのはもう病院側があつたんで、そこら辺は普通の方と比べては緩かったですね。正直。

鈴木　なるほど。

押切　うん。

鈴木　じゃあ、あの、ヘルパーさんが入るときって彼女さんも一緒に必ず入るような感じなんですか。

押切　もう基本的に来てましたね。ほぼ。フフ。

鈴木　なるほど。

押切　やっぱその、外出の目的として、やっぱその彼女さんと一緒にラーメン食べたいとか、サッカー見たいとか、そういうのがあれ、目的やったんで、あの、彼女と一緒に出たいっちゅうのがあつたから、やっぱり必然とついてきました。

鈴木　フフフ。

押切　ついてきてとっちゅうたらあれなんですけど。

鈴木　なるほどなるほど。

押切　一緒にいましたね。

鈴木　あー、なるほどね。じゃああの、重訪のヘルパーさんの役割としては、まあ基本的に

はまあ、身体的な介助の部分はやるけどっていうことですよ。

押切 そうですね。もう、あの、車いす移動であったり。

鈴木 はいはい。

押切 例えば、まああの一、まあ、排せつとかもそうなんですけど。

鈴木 うんうんうん。

押切 基本的にはもう身体的介助はヘルパーさんがやりましたね。

鈴木 なるほど。で、あの一、最初にね、押切さんがあの、アシカリさんと会ったその2013年の夏に、あの一。

押切 はい。

鈴木 押切さんはどういう説明されたんですか。JILの説明もされたんですか。

押切 いやもう、そこまで。

鈴木 うん。

押切 深一い話はしなかったですよ、もう本当5分10分ぐらいやったんで、あの一、まあ、どっから来たん、いや別府つつって、その、な、え、何、どこの施設みたいなやった、確かだったと思うんですよ。いや、俺施設じゃなくてみたいな、その、一人暮らししてるんやって、ヘルパーさん使ってぐらいの、それぐらいの会話で、ヘルパー制度、この身体とかそういう説明とかはしなくて、ただ単に、一人暮らししてるっていうぐらいで終わったと思いますね。

鈴木 ああ。

押切 そこは本当、長い時間でなかったんで。

鈴木 ああ、いそい、お互い急いでてみたいな。

押切 そうですね。コンサート始まる、フフ、始まっちゃうからとかいって。

鈴木 で、その後、えっとー、えっとー、ん、2回目に会うことってのはそのバーベキュー以降ですか。

押切 確かそうでしたね、もうバーベキューとかでしたね。な、なんやかんやでアシ、外出したらもう多分その、多分、2、3回ぐらいしか僕ないんす、一緒に外出したの。なんでその、会ったっちゃそのバーベキューとか、あとちょっとセンターのイベントで別なちょっと湯布院と、湯布院ってあるんすよ。

鈴木 はいはい。

押切 観光地の。

鈴木 分かります。

押切 そこ行ったりとか、そんぐらいでしたね、ちょっと気軽にちょっと今週また遊びいこやとかそこまでがつつりした関係ではなかったですね。うん。

鈴木 じゃあ、え、でもいつかはその JIL の話とかもするわけですよ。

押切 そうですね。その、まああの、自分たちの活動としても、自立支援ってのがあって、まあアシカリさんもね、あの、そういった外出とか地域に興味があったんで、まあ独り暮らししてみない？ 的な感じは言っていた中で、まあやってみようかねってなったときに、あの一、まあそういった説明はしましたよね。やっぱ JIL っちゅうのがあって、その普通の訪問介護事業所とは違って、当事者主体の理念があってちゅうところで(###@00:42:51)はしたです。

鈴木 それはもう、その翌年以降ですか、その、そういう話をしたのは。

押切 そうですね。一回その僕が埼玉に行ったじゃないですか。

鈴木 はい。

押切 埼玉行ってたんで、その間はちょっと別な方がそのアイエルピーしとったんですけど、その間をちょっと僕もちょっとあんまり(****ハンセン@00:43:08)できてないん

ですけど、一応そういったのを教えたっちゅうか、伝えましたね、アシカリさんに。

鈴木 その、アシカリさんの反応どうでしたか。そのとき。

押切 ま、正直、あの一、したいなーとは思っただけなんですけど、まあ、なんせその病院が自由に外出できてんで、その彼女とかとですね。彼女、家族とも含めて。じゃけん、したいなーと思ってたけど、まあ多分、反面、別にこのままでもいっかかって思ってたのは確か言ってましたね。

鈴木 なるほどね。

押切 コロナになる前まではですけど。

鈴木 コロナ。

押切 自由だったんでね。コロナになってそれができなくなったんでみたいな感じやったんですけど。まああの。

鈴木 で。ええ。

押切 興味はあったけど、そこまでもう追い詰められてる感じではなかったですね。もうしないといけない、しないといけないっていうような感じではなかったです。

鈴木 うんうん。あの、ちなみにあの、病院関係者の人に JIL の話とかされました？

押切 えーっと。

鈴木 そのとき。

押切 病院関係者には、いや、してないですね。

鈴木 ああ、してないんですね。

押切 病院、うん。

鈴木 なんか聞かれることもなかったってことですね。

押切 あ、ないですね。あの、結構もう「アシカリさんに来ました」ったら、「どうぞ」みたいな感じで入ってきたなんで。え、誰ですかとは言われなかったですけど、そのNPO法人自立支援センターみたいに自立支援。

鈴木 ああ、そうですか。

押切 来ましたーみたいな感じは言ったことないっすね。もうアシカリさん、あ、ナースステーションに行って、「アシカリさんお願いします」って言ったら、「どうぞ」みたいな感じで。

鈴木 あ、そうですか。

押切 そのままスーみたいに行きましたね。

鈴木 あの、何ていうんですかね、じゃ、その、その頃から結構じゃあもう、西別府病院、たびたび訪問みたいな感じですか。

押切 あ、そうですね。たびたびつつつてもそんな、あの、毎週毎週行ったりはしないんですけど。

鈴木 うん。

押切 なんかその、例えば外出するってなったときに、ちょっと一緒に行ってみたり、計画とか出したりで行ったりとか、そのぐらいのレベルですね。本当本格的にILPし出したの、本当、コロナになってからやったんで。

鈴木 ちなみに、あの、他の方を訪問するってこともなかったんですか。アシカリさん以外の。

押切 えと、一応、アシカリさんが結局、(#####@00:45:15)に外出しよったんで、そのアシカリさんの同部屋になるんですかね、同部屋の子も、その自立まではいってないんですけど、一応重度訪問で外出はするようになりましたね。

鈴木 へー。え、それはいつ頃ですか。

押切 えっと、それも多分、僕が一回辞めたぐらいのときやったんで、ま、6、7年ぐらい前ですかね。6、7年ぐらい前からちよくちよく、ちょっとなんかラーメン屋とか行ってましたね。

鈴木 ということは、アシカリさんが始めたぐらいに。

押切 そうです。ちょっとたってからぐらいですね。

鈴木 じゃ、自分もやってみようかみたいな。

押切 そうです、そうです。で、うちのヘルパーさん利用して、なんか、ラーメン食べに行っていましたね。

鈴木 やっぱ影響受けたってことなんですかね。

押切 多分影響受けたられたの、確か同じ部屋だったんですよ。

鈴木 へー。面白いですね。

押切 同じ部屋で後輩みたいな感じやったんですけど。だってね、やっぱアシカリさんが自立したらそうって、アシカリさんが今度、(###@00:46:08)君を支援してくって形、ね、できれば一番ベストかなとは思ってるんですけど。

鈴木 なるほ、じゃあまあでも、今はその、その方は別に特についていうことなんですよ。

押切 まあその人は特にもう、ましてやコロナでもありますし。

鈴木 うん。

押切 なかなかもう、全然外出できないのと、やっぱり筋ジスってあの進行性やないですか。なんか進行もちよっと出てきたみたいですね、やっぱり。

鈴木 あー。なるほどね。

押切 やっぱ出たいけど、やっぱ体が追い付かないみたいな形、そうですね、昔よりはなんか進行はしてるみたいですね。

鈴木 うーん。アシカリさんはどうなんですか。進行って部分では。

押切 進行、俺してないような気がするんですけど、10年前近く前から。

鈴木 あ、そうですか。

押切 会ってるときより。

鈴木 ええ。

押切 なんか、やっぱ本人としてはちょっとなんか体感がとかなんか。

鈴木 ふーん。

押切 言ったりしてるん、なんか。でもなんか、あんまり俺変わってない気、なんかするんですね。

鈴木 あ、そうですか。

押切 ちょっと痩せたかもぐらいで。

鈴木 へー。で、えっとー、アシカリさんからその退院っていうことを希望してるってのはいつ、いつお聞きになったんですか、押切さんは。

押切 そのコロナになって退院す・・・。

鈴木 コロナ、ええ。

押切 そうですね。あの、退院したいってなったときですよ。もう自立するって聞いた話ですよ。それは、ほん、あの、それも、何年ぐらい前かな、何年、ちょっと正確には覚えてないんですけど、多分、5、6年前ぐらいやとは思うんですけど。

鈴木 あ。

押切 何回か自立しよっかなとは言ってたんですよ。

鈴木 そうなんですか。

押切 したいなーとかって。

鈴木 へー。

押切 でも、なんやかんやで結局、自由に外出できるから、結局何度かお流れになったんですよね、結局。「したーい」って言って、「じゃあしよっか」ったら、「うーん、ちょっと考えてみるわ」って言って、「やっぱもうちょっと先でいいや」みたいな感じで、(****ヤイトラ@00:47:56)しよったんですよ。5、6年前から。

で、正確に、その、もう本気で自立します聞いたのは、去年のえーっと8月中旬ぐらいですね。2020年の8月ぐらいですね、にもう、もうコロナもだから、「もう本当無理」とか言って、そのじ、自立したいからってということで、本格的にILPスタートでしたかです。

鈴木 電話かなんかでかかってきたんですか。

押切 えっと、アシカリさん電話持ってないんで、もうあの、Facebookのメッセージですね。なんか持ってるんですけど、スマホじゃなくてなんかガラケーで、あの耳に当てられないんで、自分で、だっけもう基本的にメッセージっすね。か、Zoomか。

鈴木 え、ああ。

押切 で、もうその連絡を受けたのはメッセージです。

鈴木 メッセージってやっぱ便利なんですね。

押切 便利っすね。

鈴木 うん。もうかなり深刻な感じで、もう出たいんだみたいな感じだったんですか。

押切 そうですね。「出たいなー」みたいな。

鈴木 うん。

押切 で、な、あんとき、あれの後だったんです、あの。筋ジスプロジェクトのなんか、ア

シカリさんが自立したいって言う前から筋ジスプロジェクトと関わってたんですよね。で、筋ジスプロジェクトの会議だかなんかの後にその連絡が来たんですよ。

鈴木 うん。

押切 多分それって、周りがそういった話を聞いたりしよったと思うんですよ。筋ジスの方が自立してとかって。っていうな話聞いて、もう多分それで火ついたみたいな感じですね。

鈴木 ハハハ。

押切 ハハ。で、終わってから、メッセージ来て、「やっぱ俺自立するわ」みたいな連絡受けたみたいな感じですね。

鈴木 へー。でもうすぐに本格的に動き出したってことですか。押切さんたち。

押切 そうですね。そうですね。一応あの、まあ、任せろと言ったのはいいけど、俺、あんまり筋ジスの知識ないんだけどみたいな感じで、最初。その、「いいよ」って言ったんですけど、そこまでその僕も、あんまり関わったことなかったんで、筋ジスの人、アッシー以外ですね。で、その医療機械もそうですし、呼吸器もそうですし、そういった情報が少なかったんで、結局あの、まああのメインのナカニシさん、メインストリームのナカニシさんとか、あとまあ呼吸器使ってる方の知り合いは、あの県外にはいたんで、その人の家にちょっと連絡して、あの、ちょっと、あのアシカリさんっていう人が自立し、呼吸器使用してて、自立したいっていう人いるから、ちょっと、あのオンラインでILPするからちょっと手伝ってみたいな声掛けして、で、えーっと、9月からスタートした感じっすね。

鈴木 9月。あー。

押切 そうですね。8月中旬ぐらいにアッシーから連絡受けて、で、声掛けして9月からスタートみたいな感じですね。

鈴木 これ、毎月、ん、ん、毎月というか毎週ですか。

押切 えっと、最初、結局集団でやったんですよ、1対1というよりは、その、講師を呼んで、その自立生活プログラムっていう一通りの流れですよ、結局JILの理念であったり、介助者との関わり方とか金銭管理とか生保とか、そういったのを1カ月通して、1カ月間かけて、取りあえず10回ぐらいやったんですかね。

鈴木 1週間2回とかですか、じゃあ。

押切 そうですね、1、2回はしましたね。2回とかそんぐらいですね。

鈴木 うん。1回大体何時間ぐらいやるんですか。

押切 基本的、アシカリさんが13時15分からって言うんですよね。スタートが。

鈴木 え、十・・・。

押切 13、13時15分から14時半とか、長くて15時とかなんで、1時間から1時間半ぐらい、1回は。

鈴木 反応どうでしたか。あのアシカリさん。

押切 いや、やっぱりその、ま、キラキラしてましたね。キラキラしちゃったっちゃうか、やっぱりその、何ていうんですかね、やっぱ、入院しとったら、周りがもう結局、ね、病院内ちゅうことで、もう完璧、看護と利用者っていう多分、完全に看護と患者っていう関係で、そういったのが全然その自立生活、ヘルパーさんとの関わり方とか、自由なこと、自由なことっちゃうか、自分が望む生活してるっていうの多分想像できなかったと思うんですよね。入院してると。っていう中で、その、全国でその自立、呼吸器利用して自立している方の話聞くことで、やっぱりその、すごいなんか前向きっちゃうか、明るくなった気はしますね。

で、本人もすごい勉強になるとか、ま、一番多分、あれやったのは、そのコロナで結局彼女と(#####@00:52:34)て、人と会うとか人と話す機会がなかったから、とって、それを周りのみんなと交流したりとか仲良くなったりするっちゃうのが、やっぱ本人が一番うれしかったみたいですね。

鈴木 あー、なるほどねー。戸惑いとかなかったんですね。あの、つまり、いろんなことを自分でこう決めたり、やらなければいけないですよ。

押切 そうですね。なんで、取りあえずその最初の1カ月間は、アシカリさんがその集団でやったやつですね。最初の9月から1カ月間をかけてやったのが、アシカリさんが、あのやりたいっていうことよりかは、取りあえず一通り自立に必要なそういった、ね、さっき言ったようなことをまず受けてみてっていうことでやったんですよ。で、それ以降はまた、あの、アシカリさんに沿ったプログラムでやってはいったんですけど、取りあえずその1カ月間

はもう、取りあえずアイエルピーってのはこんなもんだから一回聞いてっちゅう感じで受けてもらった感じですね。

鈴木 その集団でやったってのは、アシカリさん以外にも参加者がいたってことですか。

押切 えっと、ちと言い方があれやったかもしれないんですけど、あの基本的アイエルピー一つたって、僕とアシカリの1対1でやるんじゃないですか。

鈴木 ああ、はい。

押切 じゃなくて、えっとアシカリさん1人に対して、あの講師を5人ぐらい付けて、あのみんなで作るっていうよりかは、じゃあこの日は、例えばAさん担当、この日はBさん担当みたいので、まあ集団というか、講師が何人かおって、それでアシカリさんみたいな感じですね。

鈴木 なるほど、なるほど。

押切 それなんで、みんなが集まるのもあったんですよ。あの最初と、中1回と、最後は、あのみんなでこう振り返りとかやったんですけど、基本的にそれ以外に関しては、1対1プラスたまに僕が同席してるみたいな感じですね。

鈴木 へー。え、ちなみにZoomでやったんですか。

押切 あ、全部Zoomです。

鈴木 それまでってZoomでやることってあったんですか。

押切 まずないですね。

鈴木 ああ。

押切 アシカリさんも確か、その、Zoom自身、最初なんか、アッシーがZoomとかやり方分かんなかったから、Facebookとかでやってたんですよ。別、Facebookのあのビデオ付きか電話みたいなやつなんですけど、じゃあ、Zoom、Zoomでやろうやってなって、じゃあ、アッシーがなんか、そのためにいろいろこういったオンラインするためになんか機材そろえたみたいですね。

鈴木 へー。

押切 カメラとかマイクも。

鈴木 そうですか。あの一、その Zoom のセッティングって結構病院の関係者は手伝ったりするんですか。

押切 えっと、アッシーの場合はもうあの、イヤホンだけ耳に着けて、そのもう車いす基本的にやってるんですよ、アシカリさんが。なんで、もうパソコン目の前にあったらあと自分で、あの、指先が動くんで、トラックボールで、その URL 開いたりできるんで、もうその本当、全介助ってわけじゃないんで、基本的にはそこら辺、あの、手間かかるって言ったら悪いんですけど、そこまで大きな介助は必要ないんで、あの、病院側としても基本的に協力はしてくれてましたね。

鈴木 ふーん。ど、どんな協力、じゃあするんですか。あの、協力というのは。

押切 多分、イヤホン着けたりとか、多分、車いす上、こう座って、目の前にカメラが来るようにセッティングしたりとかその程度だと思いますよ。多分、ぱっと 30 秒ぐらいで終わるんじゃないかなと思うんですけど。

鈴木 ハハ。じゃあ、あとはじゃあ、アシカリさん自身がもう Zoom のやり方さえ習得すれば、もうできるような状況だった。

押切 そうですね。

鈴木 ああ。

押切 ただね、その、それも最初難しかったんですよ。その、本当は訪問しながら、ね、こういうセッティングはこうだよって教えればいいんだけど、で、教えようとしても、Zoom で教えようとしても Zoom できねえしとか、多分、フフ、ちょっとネットで調べてとか言って、調べてもらって、何回かやったんですけど。

鈴木 じゃあ、そのやりとりはメッセージャーでや、やってって。

押切 そうですね。

鈴木 はー。

押切 もそうですし、やっぱその筋ジスプロジェクトの会議とかも参加してたんで、その、あのー結構、それでずーっとこう参加もしとったりしよったんで、ちょっとは知識はあったんですよね。

鈴木 あ、なるほどね。じゃあもうそれ以前からじゃあ、筋ジスプロジェクトの Zoom に参加するっていうことはもう 2020 年の。

押切 多分し、そうですね。二千二、結局コロナが去年の。

鈴木 うん。

押切 えーっと、春ぐらいじゃないですか、春。

鈴木 そうですよ。そうですね。

押切 なんで、そうですね、結局、でもアッシーが筋ジスプロジェクトに関わり出したのが 6 月とかそのぐらいじゃなかったかなと思うんですけど。

鈴木 ああ、なるほどね。

押切 ですが、まあ、それからちよくちよく勉強のほうはしてたみたいですけど。

鈴木 うん。

押切 だから最初この接続とか伝えんのなかなか難しかったですね。

鈴木 うん。

押切 で、なんか、メッセージャーの電話でよくね？ とかなったんですけど、結局メッセージャー電話ってやっぱ Zoom みた、ね、10 人とかでなかなかつながるのが難しかったんで、やっぱそういうこと考えたらやっぱ、これから先、こういった交流とか筋プロとか、そういうのに参加するやったらもう Zoom は覚えたほうがいいよっつうことで、Zoom にしました。

鈴木 なるほどね。で、あの、2021年8月を退院に目標にしましたよね。

押切 はい。

鈴木 あ、それが、あれですか、もう、えっとーその2020年の8月にアシカリさんから希望があったときにもう、その次の年の8月。

押切 もう来年、そうですね、来年の夏、夏ぐらいしたいとかいってますね。

鈴木 ああ。

押切 秋前にも。あったかいときがよかったので、寒いのは嫌いだから。

鈴木 ああ、なるほどね。8月の17でしたっけ。19。

押切 17ですね。

鈴木 17。その17ってのは別にこだわりはないんですよ。

押切 特に。なんかお盆明けて。

鈴木 うん。

押切 アシカリさんが、入浴が月木だから、火曜日あたり、入浴の次の日だからきれいなまま退院できるとかって言っていました。

鈴木 なるほど。そういうことですか。ああ。で、なんか、あの、えっとー、タイミングが大切ってなんか押切さん書いてますよね。

押切 はいはいはい。

鈴木 これ、えっと、なんか友達、友人からこう言葉を思い出していうには書いてあるんですけど。

押切 そうですね、あのー、同じようにオンラインで、あの自立生活を実現させた方が秋田

の秋田病院っていう筋ジスの病院で、秋田病院の方が自立したときに、それを支援しとった方が僕、そのアッシーの ILP の講師にも来てくださった方なんですけど、その人がやっぱ。タイミングが大事だって言ってたんですよね。そういえば、したいと思ったときに、支援しなければ、適当にそれぞれ行っちゃってできないっちゃうことで、で、やっぱコロナの中だっただけに、じゃあコロナだからできないっていったとしても、その人にとってはコロナだから自立したいってことなんですよね。なんで、その後多分コロナが収まってしまったら、多分もう自立したいって言わなくなると思うんですよ、また自由になったら。なのでそれとも含めてやっぱタイミングっちゃうところが大事だっただけのを聞いて、あ、ほんまそうやなっちゃう思ったりするわけね。

鈴木 その方、秋田、秋田の方なんですか。

押切 あ、そうです。そうです。筋ジスプロジェクトでも来てます、そんなとき。もう、やっぱ本当そうだと思いますね。

鈴木 うん。

押切 どちらかといったらこっちのタイミングに合わせるというよりは、やっぱり、あの、自立生活をしたっていう方のタイミングに合わせないと、やっぱ、そのタイミングごと逃がせないつつって。

鈴木 やっぱそれだけ何ていうんですか、自立生活っていうのはなんか、何ていうんですかね、気持ちがこう、ひつ、必要というか。

押切 え、やっぱそうやと思いますね、これ。

鈴木 うん。

押切 やっぱそういった施設経験が長い人ってなおさらだと思うんすよ。やっぱその、出たと思ったときに出ないと、結局もういいやってなっちゃうし。で、最初そのアッシーから8、え、去年の8月に自立したいって聞いたときも、まあ、正直、ほ、本当かいなってあったんですよね。前もその自立したいって言って結構なあなあになってたんで。たら今回は違うっちゃうのを、結構その、とか言ったり、その自立したいって受けたときに、うちの代表にも、「いや、アシカリさんが自立したいって言ってるんです」って言ったら、まあ代表も知ってるんで、その何回も諦めてるっていうのを。で、ちょっとその本当はその、あの、いい意味でその探ってみてよと言って、一応、本当アッシー本当したいんですって、いや、本

当したいんだっちゅうの聞いて、で親にも説得するって言って、親と連絡取ったんですよ、実際に。で、それを聞いて、あ、今回そこまで(****オッコッタヨナ@01:00:51)っちゅうのそこで感じたっていう感じですね。

なんで、アッシーにとってはそれがこの自立のタイミングであったんで、多分それを僕たちが延ばしたら、多分アッシーはもう自立しないやろうなって思うし。

鈴木 なるほどね。で、あの一、オンラインの、その ILP っていうことを知ったのって、あの押切さんはいつだったんですか。

押切 えっと、結局、そのワシヤさんっていう(####@01:01:23)てる人。

鈴木 ワシヤさん。

押切 ワシヤさんていってね、僕、ワシヤさんとは、もう2年前の、2年前かな、2年前の秋には知ってたんですよ、会ってたんですよ、もう僕。知り合いで、ずっとやりとりはしよったんですよ。で、そん中で、そのコロナになって、筋ジスからの秋田病院からの地域移行してるっての僕知ってたんですよ、なんで。で、そん中で、その、オンラインでやってるっていうのを、もうその8月以前からそれを知ってたんですよ。そのオンラインで、ILPするっちゅうのを。なんで、じゃあオンラインでしてみようかってなった形ですね。その秋田病院の参考にしてですね。

鈴木 なるほど。じゃあ、そこでやられてる取り組みを参考にして、自分たちもやろうっていう。

押切 そうですね。もうそのまま、こう、こうしてましたね。

鈴木 へー。

押切 こうというか、もう、だけ、似て、似たようにやってたみたいですよ。

鈴木 なんかそういうマ、マニュアルとかあるんですか。やり方とか。

押切 いや、マニュアルないですね。なんで、えっと、もうほん、あの、ワシヤさんに聞いてんですよ。どう、どうやって ILP しようたんですかみたいな感じで。で、こうこうこういうふうにしよったちゅうの教えてもらって、じゃあ同じようにしてみようかとかいって。

鈴木 うんうんうんうん。で、あの、なんか全国の仲間に声を掛けてチームを結成っていうふうに。

押切 はいはいはい。

鈴木 これ、どういうあれなんですか。

押切 それが、あの、8月に自立したいっていうのを聞いて、で、僕がその、その県外の方で、呼吸器使ってその自立生活してる方を知ってたんで、その人たちに声掛けたって言って、で、まあ勝手にチームつくったんですけど、そのアシカ리를支援していくためのチームをじゃあつくりうかってなって、で、最初、チームとかなかったんですよ。ただ単にグループやっと思ったんですけど、そのメンバーから、「どうせやったらなんかチーム名作ろうや」ってなって、じゃあもうチームアシカリで、みたいな感じになったみたいな感じですね。

鈴木 あ、今でもチームアシカリがあるんですか。

押切 一応、一応チームアシカリ。

鈴木 ああ、それで動いてるってことですね。あの一、その、えっと、メインストリームのナカニシさんとかですよ。

押切 そうですね。メインストリームのナカニシさんとか。

鈴木 ああ、はあ。

押切 あと、あの一、ま、名前もう本人たち出していいつつってんで、メインストリーム協会のナカニシさんと、メインストリーム協会のフルキさんと、あと、えーっと、長野のえーっと JIL 上田の、えーっと、イデ、イデさん。あと、えっと、長崎の JIL のヤマグチさん。

鈴木 あ。

押切 とあと、そうっす、あとワシヤさんですね。

鈴木 あの、皆さん医療的ケアですか。

押切 そうですね。皆さんえっと、ナカニシさんだけ SMA なんです。あの、脊髄性筋萎縮症なんすけど、あのそれ以外は、あの、筋ジス。

鈴木 うんうんうんうん。

押切 あのー、まあワシヤさんが、ベッカー型ですよ。ベッカー型の筋ジスで、それ以外は、あの、アッシーと同じデュシェンヌですね。デュシェンヌ型の筋ジストロフィー。

鈴木 あの、ちなみにあの、自立支援センターおおいたさんでは、医療的ケアの利用者さん今までいなかった。

押切 いなかったんですよ。

鈴木 おお。

押切 その進行性の方はいらっしゃるんですけど。

鈴木 はいはいはい。

押切 その呼吸器っていうのは、昔、一回携わらせていただいたんですけど、今はとちょっと利用者さんでないんですけど、昔一回ありましたね。

鈴木 ふーん。

押切 何ですけど、長い間いなかったですね。

鈴木 そ、それは、あの不安ではなかったですか。

押切 ま、不安ではあったんですけど、やっぱりその、まあ、さっきも言ったタイミングです、いろんなね。あの、こっちが不安だからといって、多分、今回アッシーと知り合わななかったら、その医療的ケアの人って多分、自分たちとしても自信ついたんですよ、今回そのアシカリさん、医療的ケアの方を自立させたってなったら、これから僕たちの自立支援の幅も広がっていくと思うんですよ。なんで、どっかでその辺の、その不安をね、やるんだ、多分僕たちとしてもなあなあになってしまう部分があったんで、本当今回はいい機会です。やったなとは思いますが。まあ不安ではあります。正直すると。

鈴木 ちなみに、あのヘルパーさんに、えっと一何かこう研修、特別な研修をするとか、あるんですか、これから。

押切 はもう継続的にやっていますね。あの、あの一介護研修とかですね、介助の研修とか。

鈴木 あ、あの一、ま、医療的ケアという部分。

押切 もう医療的ケアの部分に関しても、あの、アシカリさんがマニュアルを作ったりしてるんですよ、呼吸器マニュアルとか。それはもう配布したりとか、えっと、一応今月に、一応、西別府病院が主体となって、呼吸器研修してくれるんですよ。まあそれに参加したりとかですね。そういったんでやっていくプラス、やっぱり最初の自立してすぐちゅうところに関しては、朝晩に、朝と夕方に、ちゃんと訪問看護を入れて、それも医療的体制がちょっとそろえたりはして。

鈴木 もうちなみにあれですか、ヘルパーさんはそろっているような感じになってるんですか。

押切 もうそろってますね。そろえましたね。

鈴木 すごいですね。

押切 で、それがなんか、一応、アッシーとその病院間(****キコウ@01:06:28)ってのはいろいろ新聞に取り入れられて。

鈴木 うんうん。

押切 その大分のローカルな新聞なんですけど。

鈴木 ハハ。

押切 その新聞に掲載されたその日に3名から、あの、介助者募集来て、まじかよみみたいな感じだったんですけど。

鈴木 何名ですか、基本的に。何名体制で。

押切 えーっと、基本的には、まああの専属ってわけじゃないんですよ。自分たちのセンタ

一として、一応アッシーをサポートしてくのは、まあ一応そのコーディネーターとかそういうのを含めて、まあ10名ぐらいでは支援してこうかなと思ってます。

鈴木 24時間ですよ。

押切 あ、24時間です。時間数的にも、えーっと24時間なんで、744時間なんですよ、1カ月で。

鈴木 うん。

押切 24掛け31で。

鈴木 はい。

押切 プラスやっぱ一部2人介助が必要なんで、一応あの別府市役所のほうに申請してんのは842時間。

鈴木 うんうんうんうん。

押切 ですね。

鈴木 もう申請されたんですか。

押切 申請して、一応審査会が今月あるんですけど、一応市役所ともやり取りしてる中で、ま、これ以上の時間数はせいぜいここぐらいまでだなとは言ってたんで、多分大丈夫だと思います。

鈴木 それいつ頃申請されたんですか。

押切 えっともう、えーっと、今、7月だからもう、先月6月頭ぐらいには多分してると思う。一応その相談支援専門員がうちじゃないんすよ。また別なところで、そこら辺のやり取りっちゃうのは別業者になってきてて、その、まああの、相談支援専門員の方が、もともと西別府の職員やったんですよ。から、その、えーっと相談支援、別事業所に移って、で、アシカリさんのことを昔から知ってたんですよ。なんで、それやったらちょっとあの、アシカリさん自身も、結構関りがあったんで、じゃあ、そこに相談支援を任せるっちゃうことで、それでそこと連携取って、今自分たちがやってるかっていうんで。なんで、そういった

行政的なその中継地とかは、その相談支援専門員さんにやってもらって、アイエルピーとかに関しては自分たちがやってる形。で、一応その申請に関しても、先月中に出してるんで。

で、最初なんかね、842時間が出さないで、もうちょっと時間短く出してたんですよ。それは、アシカリさんのほうからもうちょっと不安だから 2 人介助の時間を増やしてほしいってということで、今回 842 時間で再申請した形ですね。

鈴木 ふーん。その相談支援専門員さんってのは、社会福祉法人のいる事業所にいる人なんですね。

押切 えーっと、別事業所であの、そこも相談支援専門、ん、なんだ、なんだろう、なん、事業所ですね。メロディーっていうところですけど。

鈴木 はい。メロディー。へー。

押切 はい。

鈴木 でも、あれですね、本当に理解のある方がそういうとこにいらっしゃるんですね。

押切 そうですね。やっぱり、なんか知ってたみたいなんで。なんか。

鈴木 おー。それ、それは押切さん、し、あ、アシカリさんが知ってたんですね、ぎゃ、逆に言うと。

押切 あー、そうです、僕全く知らなかったです。

鈴木 ああ。セルフプランにはしなかったんですね。

押切 ああ、してないですね。

鈴木 それは、まあ、検討はされたんですか。セルフプランは。

押切 は、してないですね。してなかったですね。

鈴木 ああ。まあ、そういう人がいれば、まあいいってということで。

押切 そうですね。

鈴木 ああはあ、はあ。へー。

押切 もう取りあえずアシカリさんも、あの、もう病院から出ることばかり考えてたんで、もうそこまでで、セルフプランでなくても、あのそれは退所つつてる。

鈴木 なるほどね。で、えっと一、その8月、えーっと9月か、9月に集中的に、えっと ILP やって。

押切 はい。

鈴木 で、その後、えっと一10、10月とか11月ってのが、個別になっていくんですか。

押切 そうですね。個別で週1、2回ですね。1時間ぐらい、まあ、あの話す、ただ話すときもあれば、そうやってその、結局介助体験とか始めたのも、介助体験とか始めたのは多分、12月、11月ぐらい、12月前ぐらいからやったんで、それまでは、どちらかといったら、親の交渉とかのほうをやったんで、親の交渉だったんで、そちらの話したりとか、じゃあ親交渉して納得させるためには、何が必要かなとかそういった材料とか2人で考えてやった感じで、で、11月とか、11月ぐらいだったかな、親へ交渉して、何月だったかなぐらいに親交渉して、OKが出て、で、そっから、調理を、調理体験とか掃除体験とか、そういったのをしましたね。

鈴木 え、ちなみに親って結構反対してたんですか。

押切 む、むちゃくちゃ反対してましたね、最初は。すごかったですね。その、結局年金のね、手帳の管理とかも全部親やってたんで、で、なんか、もうなんか、アシカリさん自身はもう親を納得させて退院したいらしいんですよ、結局。退院したいっちゃうのがあって、まあ言ってみたらもう18歳ですし、で、まああの、いろんな手段使えば多分、親の承認なんかなくても退院ぐらいできると思うんですよ、いろいろ。多分全国的にもあるじゃないですか。

鈴木 うん。

押切 親じゃなくてその、裁判とかで。裁判じゃない、弁護士付けてるところだと思うんですけど、そういう方法があったんですけど、まあそこまでしたくないっちゃうのがあって、じゃあそこまでしたくないならもうアッシー言うしかねえじゃんみたいな感じで、何回か

言って、で、めちゃくちゃ反対しよったんですけど、結局親を呼んで、センターに来てもらって、で、アシカリさんをパソコンでつないで、まあアシカリさんの思いであったりとか、結局そういうのをまあ話して、その何日か後ぐらいに、アシカリさんが親に電話もう一回して、したらもう、もういいよ、やってみなよみたいな感じになった感じっすね。

鈴木 親ってというのは両親ですか。

押切 そうです。そうです。アシカリさんのお父さんとお母さんですね。

鈴木 両方ともやっぱり同じように反対されてた。

押切 そうですね。同じように反対してますね。反対しよったっすね。普通に。でも、なんやかんやで結構そのアシカリさんの所になんか毎週洗濯物取り来たりとか、もうアシカ、あの、多分、アシカリさん本人をこう、なんか自立したら、多分自分たちから離れてくんじゃねえかみたいな感じじゃないかってアッシーは言っとったんですね。で、ましてやなんか、これは家族の話だから俺が言うのも何だかもしれないんですけど、そのアシカリさんお兄さんがおるんすよ。確かお兄さんおって、で、すごいなんかお母さんと仲いいらしいっすよね。仲良くて、お父さんとあんま仲良くないらしくて、で、逆にアッシーはお父さんとも仲良かったんで、お父さんはさみしいんじゃないかとかってのは本人は言ってましたね。

ただでもやっぱりね、その自立したからって結局親と会えないとかってわけでもないし、逆に入院してる時よりかはもっと自由になるわけだから、ね、そういった時間っての大きいにつくれると思うんで。

じゃけん、アシカリさん自身も、別に自立したからといって親と、ねえ、その、あの、縁切るっちゅうか、会わんとかそんなないし、親孝行したいとも言われてるんで、もう結果として自立することはもういい親孝行になるんじゃないかって思いますね。

鈴木 その11月に、親、親、あのお二人を呼ん、センターに呼んだんですね。

押切 そうですね。事務所に来てもらいました。

鈴木 へー。で、えっとー、まあアシカリさんからそういう話があって。

押切 そうです。そうです。そうです。

鈴木 で、そのときのご両親の反応っていうか、どうだったんですか。

押切 一番最初に言ったのが、「いやあ、この子、体が重いから、あの一、ヘルパーさんの体壊すわ」とかそういう話しよったっす。いや、そういう感じじゃなくてみたいな。やっぱりその、結構みんな言われるの、ヘルパーさん使うのもお金がかかるとか。

鈴木 えー。

押切 ていうのが多分、思ってる方もいらっしゃって、まあアシカリさん自身も、いやそうじゃなくて、そういった制度使えば、あの、ヘルパー代はかからず利用できますっちゃうそういう説明もしたりとか、で、で、実際にその、フルキさんですよ、メインストリーム協会のフルキさんが、なんか自立生活してる動画があったんで、それを見せたりとかそういったのをして、で、アシカリさんが結局、じゃああの、いや、自立したら、あの、マンション借りたりとか、あのご飯作ったりとか買い物したりとかして、金はどうやって稼ぐんかいみたいになったんですよ。したときに、やっぱ、あの、一応、まあ自立指導については、うちのセンターと一緒にスタッフとして活動してくんで、ま、その給与補償であったり、結局、特別しよ、あの入院中はその特別障害者手当ってのが出ないんですよ。その障害基礎年金だけなんで、で、地域移行にしたら、特別障害者手当ってのが2万7000円ぐらい出るし、ま、そういった形で年金と特別障害者手当と、あとはその活動費、自分たちのセンターとしてのスタッフとしての給与があればもうそのね、あの、遊び放題遊べてぜいたくな暮らしってまでは行かないんですけど、まあその普通の人の最低限の生活はできるってのを伝えたりとかですね、そういった金銭面だったり制度であったり、会社のことであったり、まああと、この(#####@01:15:21)、えー、実際自立生活されてる方の動画見せたりとか、そういった時間でしたね。

鈴木 じゃあ親御さんとも結構じゃあ、押切さんのほうから結構説明はされたってことなんですね。

押切 そうです。自分とあと、あの代表の後藤さんですね。

鈴木 ああ、なるほどね。なん、何時間ぐらい、あの、親御さんいらっしゃったんですか、そのとき。

押切 1時間から1時間半ぐらいだったと思います。

鈴木 1時間半。

押切 1時間半ぐらい。はい。

鈴木 なるほどね。実際の生活をこう見るってことまではしないんですね。動画だけってことですよ。

押切 あ、そうですね。

鈴木 はあはあ。そのときは、ま、一応な、納得っていうか、まあされたんですかね、説明を受けて。

押切 あら、うーんみたいな感じで。

鈴木 あら、うんか。

押切 そっから、考え、あの帰って考えますわみたいな。

鈴木 ああそうですか。

押切 ちょっと即決はできないですわみたいなことで。

鈴木 なるほどね。で、あの、電話があったのは何月だったんですか。

押切 なんか、いや、数日後でしたね。僕に電話があったんじゃなくて、アシカリさんが、たまたまなんか、なかなか返事来ないから、聞いたんですね。僕も翌日とか翌々日ぐらいに、「アッシー連絡来た？」つつたら「いや、来ない」つつって。で、次の日「連絡来た？」って「来ない」つつって。「どうするん」つつたら「じゃあ俺からかけるわ」っていって、何日かやったら、アシカリさんから親にかけたみたいですね。

鈴木 なるほどね。で、そのとき親としてはなんと行ってたってことなんですか。

押切 え、なんか、もう、いや、もうあんたの好きにしたらいいやんみたいに言われたんです。もう手帳も返すわみたい。あ、手帳じゃ、年金のて、あの通帳もおまえに渡すわみたいな感じだったです。

鈴木 まあ、な、一応納得してくれたっていう。

押切 一応なんか納得してた。ハハ。

鈴木 ハハ。なるほどね。で、その後が、えっと一2 月ぐらいになるとまあ、えっと、ちょ、最初何をされたんですか、そのちょ、調理。

押切 最初、調理から行きましたね。

鈴木 調理から行ったんですか。

押切 アシ、アシカリさんも、一発目やったんで。

鈴木 はあ。

押切 あの「何したい」つつたら「ん、料理したい」つつたんで。

鈴木 へー。

押切 「じゃあ料理しようか」ちゅうことで。

鈴木 それは。

押切 で、基本、うん。

鈴木 1 カ月。

押切 えーっと、調理自体は2 回に分けたんですよ。結局、アシカリさんのそのオンラインの時間ってのが大体 1 時間半ぐらいしか取れなかったんで、で、どうせ調理やるんやったら、その食材の食材選びから買い出しまでの一連の動作やりたかったんで、2 日間に分けて、1 日目は、そのえーっと、結局調理を作るための食材を買いに行くところが一つ。

で、また次、別な日に、じゃあそれを食材を使って調理の2 日間に分けてやったんですけど、その前にはやっぱりその、結局オンラインで全てやるわけなんですよ。その iPad でやったんですけど、iPad 使ってやったんですけど、結局その店内に行くときに、店内でこう商品選びますよね。例えば。そんでマーボー豆腐作ったんですけど、豆腐見たりとかなんかいろいろネギ見たりとかしよったんですけど、どうしてもカメラをこう写してやるっちゅう中で、やっぱりその、あの、店側のやっぱ許可も得なくちゃいけないねって話になって、じゃあ一回店長さんに、じゃあ依頼文出してっていうところからスタートしたんで、あの、調理工程自体は2 日間やったんですけど、それで準備とか入れたら、大体半月ぐらいですね。

かかりましたね。

鈴木 半月。ああ。

押切 あの、一応あの、一緒にその依頼文考えて。

鈴木 へー。

押切 で、店長さんに依頼文出して。

鈴木 はあ。

押切 で、返事返ってきて、じゃああの、じゃあどういふうにやるかっちゃう話して、買い物行って、で、作って、で、振り返りしてってのが半月ぐらいです。全部の。まああの。

鈴木 一緒にやるんですね。なるほど。はー。

押切 そうですね。あの。結局依頼文出したの僕なんですけど。

鈴木 ああ、ああ。

押切 僕が行ったんですけど。

鈴木 でも文章考えるのはアシカリさんも考えて。

押切 そうですね。一緒に考えて。

鈴木 へー。それやってみてどんな感じだったんですか。やる、やるほうとしては。

押切 いや、楽しかったっすね。楽しかったし、あと、意外に店長さんとかもすごい協力的で、あの、当日、その商品選びする当日に、こう、iPadでアッシーつないで、店長さんとアッシー顔合わして、よろしく、きょうはよろしくお願ひしますとか言ってたし、やっぱその辺の、やっぱもともとそういった自分たちのセンターの利用者さんとかが買い物行くようなスーパーやったんで、まあそれなりの理解は大きかったっすね。

鈴木 ふーん。で。

押切 楽しかったです。

鈴木 アシカリさんの反応もよかった。

押切 は、楽しかったっつって言ってましたけどね。それで楽しくないって言われたらなんか。ハハ。ショックだと思うんですけど。「いや一面白い」っつってましたね。

鈴木 あのー、やっぱりやってみて、意味があるかなと思います？ あの、要するに、体験室で普段は多分やると思うんですけど。

押切 はいはいはいはい。

鈴木 オンライン上でやってみて。

押切 いや、あれは、結構、あの、大切だと思いましたね。やっぱりその結構障害が重たくなるほど、なかなかその外に出てくのが厳しい方っていらっしゃると思うんですよ。その長時間とかってなったときに、今回そのオンラインっていう活用がで、えーオンラインを通してできるってのを知ったことで、やっぱその自立支援の幅って広がったと思うんですよ。その、例えば、ざあざあ雨降ってるのが、まあそれを雨降ってる中、かっぱ着ながらその買い物行くってのも一つの歩みかと思うんですけど、ま、それ以外でもやっぱ、そのね、やっぱ風邪とか引いたら命に関わる障害とかもあるんで、そのオンラインを通してそういったのができるっていうのは、これから本当活用していきたいなとは思ってますね。

鈴木 なるほどね。で、その後掃除をやるんですしたよね。掃除が。

押切 掃除もしますね。なんかその間に。

鈴木 ええ。

押切 間、間にちよくちよくやってはいたんすよ。なんかあの。

鈴木 はいはい。

押切 家具・家電見にいたりとか。

鈴木 あ、iPadで。

押切 なんかそれとか。iPadで。

鈴木 へー。

押切 なんか、か、家具屋さん行ったりとか。

鈴木 それまた依頼文書いて。

押切 えっと、えーっと、家具屋さんに関しては、うちのセンターのスタッフさんが知り合いやんで、その方と知り合いやったんで、そこは依頼文要らなかったっすけど、その家電見に行ったときに、やっぱ、あの、要りましたね。そのなんつたらいいですかね。その店長にここまた持ってって、一度会いましたね。

鈴木 やっぱりそれで見ると、結構やっぱり、あの一何ていうかな、あの、それなりにまあ選べるっていうか。

押切 あ、そうですね。やっぱり違いますね。

鈴木 ふーん。

押切 ま、結局見たのはいいんだけど、買わなかったっすね、結局。買わなかったんですけど、やっぱ見るっていうその、ね、冷蔵庫が幾らぐらいするとか、洗濯機が幾らぐらいするとか、そういったのを、まあ機会がなかったみたいなんで、ま、本人としてはいい経験やったかなっちは思いますね。

鈴木 なるほどね。で、お掃除もやって、それは2月の26でしたっけ、お掃除はね。

押切 そうですね。もう掃除とかに関しては、もう年越してからになりましたね。

鈴木 うんうんうんうん。

押切 本当は1月にもうがつつりやりたかったんすけど、1月があれやったんですよ。その日本財団の、あの結局体験室ができたのが1月やったんで、あの、ね、なかなかその1月、体験室の物品そろえたりしちよったんで、なかなか時間取れなくて、で、もう1月いっぱい

で、その基本的なその各家電が体験室にそろったんで、で、2月か、目ぐらいからもう(###@01:22:35)だけをその日本財団の助成金頂いてここへ造らせていただいた体験室でやっていった感じ。

で、あの掃除とか洗濯とか、掃除、洗濯、あとはその介助研修とかそういうところを選んでくるんですけど、そういったのをもうあの、月、じゃない週、週一とかぐらいでやっていました。

鈴木 あ、週一で、2月以降週一ですか。

押切 そうですね。週一。

鈴木 あー。

押切 あ、でも、週一、週に1回ぐらいですかね。2週に、まあ振り返りとかもやりながらだったんで、振り返りと計画を繰り返しながらやったんで。

鈴木 ふーん。で、掃除やって、えっと一介助体験やってみたいな。

押切 そうですね。かい、介助研修とか。

鈴木 研修やって。介護研修はいつぐらいからやる、やり始めたんですしたっけ。

押切 研修も、えーっとね、研修の体験室やってからです。

鈴木 ということは。

押切 なんで2月以降ですね。

鈴木 2月以降。3月とか4月とか。

押切 そうですね。

鈴木 ふーん。ちなみに。

押切 その介助け。

鈴木 ああ。あ、いい。

押切 介助研修やる時も、結局人形が要るっちゅうなんで。

鈴木 そうですよ。

押切 介助人形が要るってなったときに、うちに人形なかったんで、その別な、埼玉のJILから介助人形借りたんですけど、借りてるんですけども。それ取り寄せたりしよったんで、やっぱ3月とかからですね。3月、4月ぐらいからやりましたね。

鈴木 その介助人形使った研修ってどんな、あの、あれですか。印象としては。押切さんやってみて。

押切 まあ、あの、それもワシヤさんから聞いたんすよ。

鈴木 ああ。

押切 あの秋田の。で、あのワシヤさんが支援した方が、結構体小さい方やったんですよ。じゃけん、人形と同じな体重やったんですよ。ただアッシーがその倍ぐらいあるんで、やっぱ、やってみて思ったことは、それなりのイメージはつかめるんですけど、やっぱ実際とその関節の可動域もそうなんですけど、可動域とかあと体重とか、まあ本人の身長も含めてですね、やっぱ実際と全然違うんですけど、まあこういった流れやっちゅうのは分かってもらえるんで、まああの、言い方悪いですけど、やらないよりはましかなっちゅうことですね。

鈴木 なるほどね。

押切 で、やっぱ、ヘルパーさん自身も、あのね、ゼロでその実際たい、入るっていうよりかは、そういった人形使ってればもう若干その流れを知ってるほうが多分ヘルパーさんのあの安心もすると思うんですよ。ですね。なんで、まあそれはもう同じこと何回も繰り返してるんですよ。きょうもやるんですけど、きょうも今から行くんですけど。

鈴木 ああ。

押切 ま、同じようなことを何回もしようみたいな。

鈴木 うーん。もうあの、じゃあ結構長いんですか、かい、介護研修は。

押切 時間的にですか。

鈴木 あ、えっとー、もう何カ月間もやってるって状況ですか。

押切 あ、もう結構やっていますね、もう2、3カ月、もう4月ぐらいからは結構ずーっとやっていますよね、なんやかんやで。

鈴木 内容としてはもうあれですよ。身体介助の部分の。

押切 あ、もう身体介助です。着脱。

鈴木 はい。

押切 あと、体位交換とか、排せつとかそういったことですよ。食事介助とか。

鈴木 じゃあその人形に対して介助者がやって、やるわけですよ。で、それを。

押切 アシカリさんが見てる。

鈴木 見て指示するわけですね。

押切 あ、そうです。そうです。

鈴木 これをこうしてくださいとか。ああ。

押切 そうです。

鈴木 ほおほおほおほお。なるほどね。でもまあ、気持ちとしてはやっぱり、実際にやったほうがいいんじゃないかっていうふうには、押切さんは思うってことですよ。安心感というか。

押切 多分絶対あれはやったほうがいいです。

鈴木 ですよ。

押切 やったほうがいいです。

鈴木 あの、つまり、調理とか掃除とか、それはまあ何とかできるけど。

押切 もう研修に関しては、僕がやってもいいんですけど、僕が人形になればいい話なんですけど。

鈴木 ああ。

押切 やっぱその、なんつうんですかね、やっぱ、その研修をす、やっぱ僕自身もこう力が入るんすよね、やっぱ、アシカリさんと違って、その分力が入るから、脱力ってなかなか難しいから、人形だったら、ね、完全に力入なくて脱力状態なんで、やっぱ、まあ若干ましかなとは思うんですけど、まあ本当やらないよりはましだと思うんですね。

鈴木 うん。でもやっぱり安心感っていう部分でやっぱり、実際にやったほうが。

押切 あ、それはもう間違いないです。

鈴木 うん、でも今回はあれですよ、ビデオ、あの看護師がやるのを、病院が撮影して、それを病院内の中で見ただけですもんね。

押切 そう。あれがよう分かんないっす。

鈴木 ああ、はあはあ。

押切 持ち出し駄目っつえ言われたんですね。（****コチラカラトルンデ@01:27:03）。

鈴木 ああ、じゃあ今後はじゃあ、びょう、病院の中でそれを見てやるしかないんすよね。

押切 なんか、そうです。それも今、確認してもらってるんですけど、じゃあ俺ら何回も見にいてもいいんですかって話ですね、結局ね。

鈴木 うん。そうですよね。うん。

押切 それで駄目って言われたら、じゃあなんのためのビデオであと何をする。

鈴木 うんうんうんうんうん。あの、何ていうんですかね、まあ、あの一よくこの京都のほうではベッド・ツアー・ベッドのなんか退院支援とかいう言い方をするんですけど。

押切 あー、はい。

鈴木 あの、それどう思われます？

押切 あれってどう、あれ、ベッドからベッドにあれですよ。

鈴木 要するに体験なしに、要するに自立、あの介護研修とか体験なしに、病院のベッドから自分の住まいのベッドに直接もう行って、もう生活始めるっていう。

押切 はい。

鈴木 最終手段。

押切 あー。ハハ。まあ。あの一、ど、どうなんですかね。それで、結局、ね、その、本当は絶対対面でやったほうがいいんですよ。対面で、対面でやって、実際にきつとあれですよ、そのベッド・ツアー・ベッドってそのコミュニケーションとかもしないで、そのままってことですよ。てなつたときに、絶対そのコミュニケーションとか取れないと思うんですよ、結局。トラブルにもつながると思うし、まあ今回その、オンラインでアイエルピーする中でも、必ずアシカリさんが介助研修とかするときは、あの、初めて会うんですよ、ヘルパーさんもアシカリさんと。で、逆にアシカリさんもヘルパーさんも初めて会うって中で、やっぱりその介助する、されるっちゅうのは、やっぱ、ね、それなりにお互いのこと知らないと、結局なかなかそういったコミュニケーションうまく取れないと思うんですよ。

なんで、必ず、アシカリさんの介助研修やる前には、あの一それは別の日に、介助研修とは別の日に、必ずアシカリさんと介助者で、あの対談してもらうんですよ、必ず、やる前に。研修する前に。それも1時間ぐらいかけてやるんですけど、1時間話してってという、ただ話してっての1時間だけさせるんですよ。

鈴木 へー。

押切 することで、あの、アシカリさんも介助者のことを知ることができるし、えー介助者もアシカリさんのことを知ることができる。やっぱりそのトラブル、ね、絶対にあると思うんですよ、その知らない人が病院から、ね、在宅に来て、じゃあヘルパーさんあとよろしくつつつても、分かんないし、みたいになるじゃないですか。で、その人のそのコミュニケー

ションとか知らないし。

絶対それは、まああの、自立者を増やすっていいことだと思っすよね。どんどんその自立者を増やしていけば。そのベッド・トゥー・ベッドはいいと思っすけど、それでじゃあ、じゃあ、トラブルとかなったときに、ね、なんか、そこまで自立生活知らないで地域移行して、じゃあそれとかもうやっぱ自分に合わなかったわけだけでも、絶対病院に戻れないわけですね、結局今って、待ち人もいるし。だから、まあ、まあ、僕の口から悪いとは言えないんですけど、まあどうせやるんやったら、その長い目で見て、その、あい、間に JIL、ILP っちゅうのを入れてあげんのがいいんじゃないかなとは僕は思っまして。

鈴木 ちなみに今回、あの知っているヘルパーさんって誰もいないんですか、アシカリさんのこと知っている人は。

押切 もともと知っているのは、その、外出支援に関わってた、その重度訪問の外出支援に関わってた方がまあ2名ぐらいいらっしやって、それ以外のもう本当7、8人は全部初めてです。

鈴木 あー、でも2名いらっしやるってことは安心ですね。

押切 そうですね。でも、2名の方は、もうどちらかといったら、あの一、アシカリさんの介助にはもう頻繁的には入らない。もうその新しいヘルパーさんで固めてってるんで、で、もうその新しいヘルパーさんたちはもうほぼみんなもうその面談が終わって、もう介助研修へ今移ってるってことですね。

鈴木 なるほどね。今回の退院について、病院の関係者はなんか言ってますか。

押切 ええ、やっぱ言いますよね。なんでこの時期なんて言いますよね。

鈴木 ああ。

押切 まあ最初は言ってたんですけど、やっぱりその、何ていうんですかね、アシカリさん自身が、病院と仲悪いわけじゃないんですよ。どちらかったら、看護師からあと(### @01:31:09)指導員とか、ま、保育士とかもそうです仲いいっちゃね、結構。なんで、まあ、そこまで反対は最初しよったんですけど、しよったっちゅうか、なんで今みたいな感じやっただんですけど、まあ今どちらかったら協力してくれるっちゅうのと、あとは今年の4月に主治医が替わったんです、アシカリさんの。で、その替わる前の主治医って、基本的に、あの、協力的でなかったんですよ。で、その、あの、まあ自分らのセンターと一回会って話しまし

ようと言っても全然会わせてくれなくて、で、主治医が4月に替わった瞬間に、その先生は外部から来た先生で、あの、もう、全然、あの一研修とかあの会議とかどンドン開いてくれて、まあそれが、主治医が替わったのが一番かってなっちゃうんですけど。

鈴木 なるほど。ちなみに支援会議2回開いてますよね。今までね。

押切 そうですね。2、2回です。

鈴木 じゃあそのとき主治医も結構、まあ協力的だっという感じなんですかね。

押切 あ、もう主治医も。はい。何なら主治医、あの、第1回の支援会議の前の事前打ち合わせにも来てくれましたね。

鈴木 へー。考え方が違うってことなんですか。

押切 なんか、あんまり詳しくないみたいっす。

鈴木 逆に。

押切 自立支援と、逆にそのなんか。

鈴木 ああ。

押切 なんか赤十字病院とかの急性期の所から来た人で、なんかあんまりそこまで格別筋ジスに詳しいような方でもなかったんで。

鈴木 逆に返ってそのことが。うん。

押切 それで、逆に、む、む、あの無知っっちゃうか、あんまりそこまで知識がなかったんで、で、もちろんその地域移行って言うことに関しても、あんまり知らなかったんで、逆にせんに、あの、で、JILもそうなんですよ。それと知識がなかったんで、逆に構えられたところはしなかったですね。もうゼロからやったで、逆によかったっすね。ハハ。

鈴木 なるほど、分かりました。ありがとうございます。なんかもう1時間半たちました。

押切 はい。

鈴木 またちょっと分かんないことがあったら、またあらためて。

押切 あ、またメールください。

鈴木 ええ。あの、貴重なお話ありがとうございました。本当に勉強になりました。

押切 あ、いえいえいえいえ。

鈴木 また引き続きよろしくお願ひします。ありがとうございました。

押切 はい。また、連絡をお待ちしてます。

鈴木 はいはい。すいません。

押切 また来週。

鈴木 はいはい。

押切 アシカリさんよろしくお願ひします。

鈴木 はい。ありがとうございました。失礼しまーす。

押切 はい。失礼します。

鈴木 はい。

(了)